

大観覧車

きらきらと大観覧車は廻りをり岬の公園さびれさびれて

たまこ

梅もぐと脚立に登りまるまると色づく実梅睥睨す我は

海斗

荷を解きてグリーンアスパラ手にとれば北の大地の春香り立つ

蘇生

馬鈴薯の花咲く畑に翁立ち羊蹄山の上の雲みる

弁慶

独歩描く武蔵野の野の風景や何処に行かば見むことを得む

海斗

独り寝の独り荒野を啄ばみぬここはガザなり石樽の空

海月

独歩なる物書き人の武蔵野は渋谷道玄坂のあたりと

詠人知らず

若者が思い思いに群れて散る道玄坂下増埒のような

蘇生

道玄坂宮益坂もその昔授業逃れて通りし坂なり

弁慶

ふるさとの心に残る急坂は今そのままにさてもなだらか

蘇生

富士アザミ籠坂峠の傍らに俯きながら咲きにかかるかも

弁慶

いくたびも背負ひし恋の重き荷も君ゆゑならば厭ふことなき

冬扇

草いきれあをく立つ野に風わたりわれら二本の草とさゆらく

たまこ

さわさわとたださわさわとさきゆかむすずらんテープ風となるまで

ばぼな

星さらさらさらさらと夏宇宙恋てふものよ猫の遊びよ

海月

夏の夜の翳宿したる瞳にて寡黙なる君寡黙なるまま

寂

空梅雨の真昼を響くドリル音 われに激しき夏の来るべし

たまこ

屈従か孤立か多に花咲けるパティオに立てばふる梅時雨

花

エレオノラ・ロッシ・ドラゴの雨が降る激しい季節月光の床

海月

助手席に「月光」を聴きつまどろみしマラソンの夫高速道疾く

しゅう

夜深く弦纏れては解けては無調にいたる髪濡れしまま

ぽぼな

朝露の黒く滲みたる砂浜に深浅二つ続く足跡

蘇生

砂浜に穴を掘りおりほろほと大朝焼にほろほと

海月

あのねぼくね大きな海へ電車でね行ってね砂でとおさん埋めたよ

海斗

あれからもう美しき蛇は現れぬかとのぐもる日の海を眺めて

花

をとつひの戯るごとき海いづこ命危ふしけふの荒波

蘇生

サスペンスのラストシーンに海は光り渚を少女と子犬が走る

たまこ

『渚にて』波は変わらず打ち寄せて「まだ時間はある。兄弟たちよ」

海月

「心配をしないで！」と告げやらん同胞よ夜の渚はふかく病むとも

花

漆黒の渚もやがて朝焼けの色に染まりて君を誘うよ

蘇生

ビルどちもそのかんばせのそれぞれにうけて輝く朝焼けの色

ぽぼな

東雲のきのふをのごふ叢雲に幽かにけふの光り見えたり

蘇生

光立つ山谷公園夏溜りトタンの割れ目夾竹桃咲く

海月

夾竹桃が乱れ咲きぬし暑かりしと敗戦の日を老婆がかたる

たまこ

さるすべりあなた居ない庭に咲き骨はうたふやすめるぎの歌

真奈

天皇制批判を日記に記す民雄身命賭して書きやらめやも

しゅう

九年の空白ありてけふもまた書くことのなし十年日記

海月

我の辺に夫なき仕合せなどと書く夜の机上に梔子匂えば

詠人知らず

寂として万象の声あらぬ夜に隠れて生きよと書き泥みつ

花

岩道にさしかかりたるわが耳に木の葉隠れの諸鳥の声

たまこ

琵琶の音よ折るる矢通る甲冑の武者呼ばはれば両耳

りようじ

古刹なる寺を巡りしコンサートで床をゆるがすモーツァルトを聴く

蘇生

目に見えぬ天の子午線月下弦奢れる人は久しからずや

真奈

聴くほどに遠のいてゆく雨音よ濡れればよかった濡れればよかった

紅

猫が寝るトクタクタクと猫が寝る夜空透かして心音を聴く

海月

文字摺の咲きのぼる芝庭にゆったりと来て猫の午后なり

しゅう

茎のびてしのぶもじずり小さくも抜じるる花として紅淡き

花

その人の母韻の差異のかすかにも恋は抜じれる恋は剥がれる

ぼぼな

ただ白くしろく咲くよとゆうまぐれ浜木綿の花一途にかほる

寂

夕化粧遠く電車の音がして街灯ぼつん猫がすり足

海月

雨音の飽和状態のわが耳に猫が冷たい鼻をすりよす

たまこ

四重奏の弓たをやかに静止してピアノシモは古刹に果てり

蘇生

ベートーヴェン四重奏曲全曲をポナスはたき買ひしあの頃

真奈

月光のシャワー隈なく浴びて立つたれか「蘇州夜曲」をうたってくれぬか 花

満月の梅雨の雲間に出でて君瑞々しいか愛は涸れぬか 花

しゅう

涸湖は西へ東へ移りゆき跡にポプラを植える人いて

海月

興奮に高窓開けん緑揺れ貨物過ぐるも朝の挨拶

ぼぼな

豆の木にジャックは登るか登れぬかかの蔵の窓ゆ魔女が見ている

花

紫陽花の葉っぱの裏で暑いねと地霊つぶやく水撒いてやる

海斗

侏儒たちの集いの果てし紫陽花は色あお空に吸われて褪せぬ

しゅう

露の葉のコロポックルよ輩よ石もて追われ今は何処ぞ

海月

ふるさとのアイヌの小母への思い出はやさしき笑みと口の刺青

蘇生

イタンペはトドのアイヌ語悪戯好きトド鍋にされ缶詰にされ

真奈

イタンキの浜ハマナスの赤き実を無心に摘んだ遠き日のこと

蘇生

イヨマンテああ溢れくる感情は旋律となる喉熱くして

ぽぽな

ざわわざわざわさとうきび畑の旋律の湧きて来る夏

しゅう

オレンジの西日をうけて遥かなる畑に西瓜の全音符

蘇生

西日うけ夏蝶とまる布グラブのどが渴いた三角ベース

海月

君知るやオオムラサキの渴望をくぬぎ林に日は傾きて

花

逢へぬ日は海を見に行く風の中あらん限りのひなげしを抱き

真奈

天地の境もあらず曖としてまた逢う日はいつ？ 杳いあなたよ

詠人知らず

胡蝶夢の汝に逢ひしは我なりや天地幽暗梯は在り

海月

湖暮れて鴨のかぼそき水脈の糸天の扉の閉じる音する

花

天気予報のはづれて雨の降る池に水脈引きピュンピュン泳ぐペンギン

たまこ

ひつぢ草ポと咲き出でてもう一人のおまへの子供と風がささやく

かわせみ

神さまが置き忘れたような小さき湖病葉一葉浮きて流れず

花

クレヨンのぬり絵のやうな緑青の水の華なる相模湖の鬱

しゅう

瞳濃き乙女が髪を靡かせて夾竹桃は輝きにけり

海斗

昼下がり夾竹桃の花ゆれて炎帝の座を鎮めけるやに

蘇生

散華とふ自死のかたちをいまもなほ讃ふや朱の花の放列

かわせみ

いろいろのわたしに会ひぬフラクタルの奥の奥まで歩いていつて

ぽぽな

POPOとNAのPOPOの貴女に逢いたくて夢に漕ぎだす笹舟小舟

花

ぬばたまの夜空の星の瞬きを猥だりがはしき星の上より

海斗

泡立草蓬蓬として空覆ふ鬱といつしよに伐つてやるべえ

海月

なだらかな西瓜畑の向こうには小高い山の遙か雲の峰

海斗

掌の中の蝉が鳴きだし子も泣きぬ雲の峰ぐらり崩るる真昼

かわせみ

接点はかすかにあつたあのと時の遠いひぐらし遠いいかずち

花

いかずちにからだ半分傾けてスタンドの灯へ半分親しむ

しゅう

百雷の生まるる頃か祖父(ほちち)銀の煙管の小さき放電

かわせみ

まいまいよ葉裏にもどれ今すぐにくわばらくわばら雷雨がくるよ

花

斜交いの連なる雨の緞帳がわれに向いて沖より来たる

蘇生

河口より黒蝶翔べり対岸へ風は沖へと吹いているのに

海月

朝顔の蔓の絡まる柵の上風に合わせて尾を振りすずめ

海斗

上へ上へ蔓の果てまで昇りゆくゴマダラカミキリ空は青いか

かわせみ

シータテハ・ギンボシヒョウモン・クジャクチョウ愛しきものは死に近き匂い花

クジャクチョウ美しすぎることに恥じてわが視野逸れし西施なるかも

しゅう

斑猫(ハンミョウ)の骸につづく蟻の道 ゆふべの夢の隧道ぬけて

かわせみ

「ねえ！聞いてよ」目を逸らさずにあの話七節虫も窓に寄りきて

花

冷房の窓より眺む三伏の木々は喘ぎし葉裏を返す

しゅう

夏の日のギリシャの空は澄みたるか日時計黙す図書館の窓

真奈

桃李和歌連作百首歌集

第五七〇一首より五八〇〇首迄

平成一六年六月十二日より平成一六年七月十五日